

「富山国際大学の聖地」と共存・共生の精神 —郷土に根ざした自校史研究—

“Holy Land of Toyama University of International Studies”
and the Spirit of Coexistence and Symbiosis : Studies in University History

大藪 敏 宏
OYABU Toshihiro

「富山国際大学の聖地」と呼ばれる場所がある。それは富山県の合掌集落・小原であり、「違ったものが違ったままで共存できる原理」や「人間・自然環境などが共生する社会の原理」を探求する富山国際大学の基本理念である「共存・共生の精神」が育まれた地である。ここが大学の「聖地」と言われる具体的な理由を、大学創設時の「火種」となった「人と土の大学」とそこで育まれた「共存・共生の精神」をめぐる様々な資料と現地踏査をもとに明らかにする。富山県小原の合掌集落のみならず、環境科学で著名なオランダのワーヘニンゲン大学～ベルギーの国際フォーラム～中国湖南省の武陵大学での国際的な経験を資史料に即して辿りながら、「共存・共生の精神」の具体的な内実と国際性の理解に、哲学的ならびに総合学習的に取り組む。

キーワード： 風土・歴史、郷土教育、合掌集落、自校史、愛校心、聖地、巡礼、

1. はじめに—「富山国際大学の聖地」としての富山市小原の合掌集落—

「富山国際大学の聖地」と呼ばれる場所がある¹。そのように「聖地」と呼ぶ人物は、富山国際大学の創設に当初より関わられて、当初からその創設に至る過程を最も知悉しておられる稲葉實氏（三四五建築研究所代表取締役・主宰、富山国際職藝学園理事長）である。またそのように「富山国際大学の聖地」と呼ばれる場所は、前研究において既に紹介したように²、富山県富山市小原の合掌集落である。このことはまた、その前研究の紀要発表から半年後の平成28年9月15日（木）10:00～11:30に富山国際大学東黒牧キャンパス本部棟2階大会議室で開催された「平成28年度富山国際大学事務職員研修会」における稲葉實氏講演「出会い、語り、そして・・・国際大学が創設された」において、稲葉氏が小原の合掌造りの旧高田家住宅の写真のスライドを示しながら研修会に出席した大学職員を前に「聖地です」と明言されたところにおいてもまた裏付けられた。

今手元にあるこの「平成28年度富山国際大学事務職員研修会実施要項」の冒頭「1. 目的」には、「本学が開学し25周年が過ぎた今、大学の設立の経緯や理念、開学当初の大学の様子等を理解の上、改めて職員として大学で働く意義や誇りを醸成し、自校への愛校心の育成を図り、職員の業務遂行に対する意欲の

向上及び資質・能力の一層の開発・向上を目指す」と明記されている。ここに記されていることは「職員」にとどまらず、教員や学生においても同様に当てはまることは言うまでもないことであろう。そしてここに記されている「自校への愛校心」が結ぶ焦点の赴く先に、少なくとも文政 2(1819)年に遡る歴史をもつ、更にそれから数百年を遡る戦国時代にまで遡る歴史をもつ合掌集落の「聖地」があることを知るならば、また単に古い歴史だけでなく、それが「聖地」となるに至った経緯において現代文明のあり方を根底から問い直す「文明批評の実践」という哲学的内実の豊かさと深さとをあわせ持つこと理解するならば、その「意義や誇り」、あるいは「愛校心」もより深い味わいととも堅固な根拠を得ることになる³。これほど遠い淵源を有する「聖地」をもつ大学は、全国的にも世界的にもそう多くはないであろう。したがってそれは稀有の淵源を有する大学ということになる。しかし、そこは単に古い歴史があるだけではない、現代文明の限界の先端を切り拓こうとする世界的に見ても稀有の先端的な実験が行われた教育と研究の先端的実験場であったからこそ、次代の大学の「聖地」たりうる「大学の火種」となる条件をもっていたのである。最も古い歴史と最も新しい実験との奇跡的な邂逅が、この「聖地」には実現しているのである。本稿では、その「聖地」の現地踏査を通じて特にその後者の歴史の一端を明らかにしたい。

2. 「奇跡の縄文の大地 蘇生の物語」と「富山国際大学の聖地」

まず直近の手がかりとして、富山国際大学の全事務職員の記憶にも新しい平成 28 年 9 月 15 日（木）の「平成 28 年度富山国際大学事務職員研修会」の記録を確認する。まずは、手元にあるそのレジユメの記録の確認から始める。そのレジユメの 1 頁目の最終行には、「※ 研修会終了後、報告書を提出することとする」と印刷されていることから、提出した報告書の控えを現に保管し、また話の内容の詳細を記憶している職員も現時点で多くいることと考えられる。



稲葉實 講師(平成 28 年度事務職員研修会) 2016.9.15.



「出会い、語らい、そして・・・国際大学が創設された」2016.9.15.

当日のそのレジユメの 1 頁には、「(株) 三四五建築研究所主宰 稲葉實」と「(専) 職藝学院・准教授 大丸英博」の連名による「出会い、語らい、そして・・・国際大学が創設された!？」という題がつけられた要旨がある。それによると、まず「～奇跡の縄文の大地 蘇生の物語～」とある。この言葉は当日の研修会において言及はされたものの、おそらく時間の関係でと思われるが詳細な説明がされたわけではなかったため、この「蘇生の物語」という文言に込められた人間の生活の歴史と文明の哲学について

解明するのは、大学の研究者の任務として残されている。

ここで「縄文の大地」とあるのは、富山国際大学東黒牧キャンパスに隣接して県指定史跡「東黒牧上野遺跡」という縄文時代中期(約4000～5000年前)中葉の集落遺跡が存在することによると思われる。そこにある富山県教育委員会ならびに富山市教育委員会による説明板の解説(平成19年3月付)によると、広さ約3500平方メートルの集落に44棟の保存状態の良い住居跡が確認されている。第1号住居跡は、8.2m×6.2mの楕円形で、屋根を支えていた柱の跡が10個ある。それぞれの柱の近くには、棒状の自然石(長さ45～75cm・直径20～33cm)が2個ずつ置かれていた。住居跡の中央には、川原石を方形に並べた2m×0.9mの大きな石組炉がある。この遺跡からは、縄文土器、土偶、磨製石斧、石錘(せきすい)、擦石(すりいし)、石鏃(せきぞく)、まじないなどに使われたと考えられる三角とう形土製品が出土しており、富山県の縄文時代中期の集落の様子を知る上で重要な遺跡とされている。上滝の富山市大山堅穴住居跡展示館には平面4.6×4.7mの隅丸(すみまる)方形で深さ0.3～0.7mの縄文時代中期中葉の第2号大型堅穴住居跡(推定約4500年前)が移転展示されていて、柱穴4ヶ所と中央に0.8×1.0mの単式石組炉(たんしきいしくみろ)があり、その内部からは磨製石斧のほか釣手土器(つりてどき)、有鉤鏢付土器(ゆうこうつばつきどき)が出土している⁴。この地は「上野(うわの)」という地名に示唆されているように(東京の上野と同様に上にある野原という含意と同様の地形構造が暗示され)、常願寺川左岸に形成された(熊野川)河岸段丘上の台地であり日当たりが良いと同時に湧水や小川によって自然の飲料水が入手しやすく、同時に縄文期の有力な主食を形成していたと推定されているクリやドングリといった木の实が今も容易に入手できるという点で、また地球資源の古来の主要エネルギー源であったバイオマス・エネルギーの先駆形である薪の伝統的主要源であった小檜が(現在の)地域の生態系的主要樹種である点でも、縄文人にとってもかなり快適好適な生活空間であったことが推定される。それゆえに、東黒牧台地には上記の上野遺跡以外にもあまり知られていない事実であるが、未調査の縄文遺跡の存在が指摘されている。こうしたことは、その自然風土に深く密着して実地踏査しないと理解できないこととは言え、縄文文化と大学創設史への理解を深めてくれる。富山国際大学の創設をめぐるレジュメは、こうした自然地理と人文地理とが交錯する深い知見とその拡張へと導いてくれる。



富山市大山堅穴住居跡展示館 2017.3.14.



第1号堅穴住居跡出土縄文土器 同展示館 2017.3.14.

こうしてレジュメの冒頭は、「キーワードは 国際化・地球資源・風土と歴史・生活文化・異文化交流 etc」と記すが、富山市東黒牧という立地の地理と歴史を理解するだけでもこれらの「キーワード」のうちの「地

球資源・風土と歴史・生活文化」をカバーしていることが分かる。つまり、バイオマス・エネルギーの起源に遡る「地球資源」に根ざした縄文時代以来の「風土と歴史」に立脚した縄文文化の「生活文化」の考古学的痕跡を残す「縄文の大地」だということが確認できる⁵。

「時代背景」としては、「1990年代前後（昭和から平成へ）の社会環境を思い起こす・・・バブル崩壊前後」において、「バブル崩壊後、地方自治体の危機迫る！？・・・大山町をはじめ県内市町村が・・・」というレジユメの記述が具体的な時代の背景とイメージを与えてくれる。このような「時代背景」の中で、「T.「若者の県外流失」を防止に資するため、高等教育機関の創設が叫ばれていた・・・」、「P.どこに、どんな大学をつくるか???・・・環境があるか???・・・」、「O.どんなものを“幾つ”つくるか???・・・理工系・法文系・社会系・人文系・・・」といった課題が検討されていたことが記されている。この課題に対する答えが、「富山国際大学の場合 「小さな大学・大きな理想」基本理念に!!」、「村の中の大学、大学の中の民家!!?・・・オランダ・ワヘニンゲン（ドイツの国境近くの村??）」をイメージして、マスプロ的ではないヒューマンスケールで構成する」、「キャンパス及び校舎建築の健康・長寿を目指して!?集落づくりの知恵に学ぶ!!」というレジユメの記述には、東黒牧の個性的な自然と歴史に根ざした富山国際大学のフィジカル・プランの作成を担当した稲葉實氏の建築家としての卓越した視点が明示されている。ここでこのレジユメの記載を補足すれば、そこに登場する大学創設時のキーワード「小さな大学・大きな理想」については、既に前掲拙稿において「「小さな大学、大きな理想」というこのキャッチフレーズは足立原先生ですよ」という2014年12月の稲葉實氏インタビューの発言を紹介しているので⁶、「小さな大学・大きな理想」の提案者は前掲拙稿で登場した足立原貫氏であることが既に明確である。またキーワード「村の中の大学、大学の中の民家」についても、既に前掲拙稿において「デザインポリシーの『“むら”の中の大学、“大学”の中のむら』は、足立原構想の中から私がサポートしたもの」という稲葉實氏インタビューの発言を紹介しているので、このキーワードの基本哲学も足立原貫氏によるものということができる。だから思想的オリジナルに遡るならば、このレジユメの「村」という漢字表記は厳密には「むら」と仮名表記した方がよいということも言える。

3. 「むら」の中の大学、“大学”の中のむら」と「数百年の歴史」

この「むら」という平仮名表記に秘められた哲学の起源は、1973年10月16日付北國新聞に掲載された足立原貫「日本海時代の道標」という文章に求めることができる。その文章は、「数々の伝説や民話が語りつがれるその山の湖のほとりの<むら>の人々のくらしの営みは、数百年の歴史をつづっていた」という文から始まり⁷、それに関連する文章が集められた著作集において「<むら>」という平仮名表記が多用されている。これが「“むら”の中の大学、“大学”の中のむら」という富山国際大学のキーワードの原点である。それゆえに富山国際大学は、このような「数百年の歴史」に立脚して構想されている点において、組織体においてはともかくアカデミック・プランの構想の哲学的射程距離においては最大級のパースペクティブをもつとも考えられる。

そしてそれは単なる空想的なものではなく、具体的な自然と歴史に立脚している。つまり、「数々の伝説や民話が語りつがれるその山の湖」というのは、富山県の有峰湖を具体的にさす。そして、「人々のくらしの営み」が「数百年の歴史をつづっていた」というその「<むら>」とは、具体的には合掌集落の小原である。この小原は1964年に廃村となったが、足立原貫氏の農業開発技術者協会が20世紀文明の哲学

的蘇生をめざす「文明批評の実践」の場として「再墾のクワ」を入れたのが1967年4月7日であるから⁸、レジュメ冒頭の「～奇跡の縄文の大地 蘇生の物語～」という言葉には、このような「数百年の歴史」をつづっていた「人々のくらしの営み」＝「風土と歴史・生活文化」が、1964年に一度は終りながらも3年後に文明の「蘇生」をかけた「文明批評の実践」が始まったという新しい歴史の物語が込められていることになる。この小原においてその農業開発技術者協会が始めた「人と土の大学」が「富山国際大学の火種」となったのだから、小原が「富山国際大学の聖地」である理由がここに初めて明らかになる。

数百年の人々のくらしの歴史が高度経済成長の結果として過疎化が進み東京オリンピックの年に廃村となりながら、その経済成長が公害など様々な限界現象を露呈しつつある中で逸早く「再墾のクワ」によって新しい文明のかたちとして文明再生の哲学的実験に取り組みされたというような地を「聖地」として有する大学は稀有である。それが「共存・共生の精神」という富山国際大学の基本理念に込められた意味であり、実際に「違ったものが違ったままで共存できる原理」はこの小原という「大学の聖地」においてその新たな実践とともにさらに数十年の歳月をかけて育て上げられてきたものなのである。大学創設時に一朝一夕で思いつかれたような手軽なキャッチフレーズではないことを語り継いでいく使命がある。

少なくとも「数百年の歴史」をもつ「その山の湖のほとりの<むら>の人々のくらしの営み」の場の「廃村」を再び、しかし同時に新たな文明のかたちの構想の拠点として「蘇生」させる数十年に渡る哲学的な「文明批評の実践」に裏づけられた創設史をもつ大学は、全国的に見ても世界的に見ても稀有であろう。しかも、小原におけるその実践が着手された1967年は、ローマクラブ『成長の限界』の1972年に先駆けたものであった。それは奇跡的な先駆性であり、「奇跡の縄文の大地 蘇生の物語」というレジュメの節タイトルには、このような史実的裏付けがあることが銘記される——なお東黒牧と小原との大地的つながりのほかに、人間的つながりについて付言すれば、そもそも廃村の小原を「発見」して農業開発技術者協会創設の契機を作った先駆者である此口幸二氏は、やがて後に大学誘致促進協議会の副会長となった東黒牧上野の川崎本蔵氏の牧場において牧場運営の経験を積み、文殊寺の台地において此口牧場を運営するようになり⁹、これが農業開発技術者協会の実践の基盤ともなるが、これは神話の物語ではなく、大学創設に至る重要な前史である——。

4. 「地球むら」の構想力と「文明批評の実践」

「むら」の中の大学、「大学」の中のむら」という「むら」が「<むら>」であって単なる「村」ではないことも、それが単に抽象的な「むら」観念ではなく、数百年の歴史のくらしの営みをもった具体的な合掌集落の「むら」であることもわかった。

だから、レジュメの1頁の下から4行目にある東黒牧キャンパスが「大山地方の農村風景をイメージして・・・“あずまダチ”と合掌造りをヒントとして・・・」という場合の「合掌造り」というのは、世界遺産の合掌造り集落として有名な岐阜県の白川郷や富山県の五箇山集落のそれではなく、「小原」郷という「大学の聖地」にある合掌造りを具体的に意味していることも補完して銘記されなければならない。

富山国際大学『平成22年度 大学機関別認証評価 自己評価報告書・本編(財団法人 日本高等教育評価機構)』(平成22(2010)年6月)の冒頭「I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等」の「1. 学園の建学の精神」で「高い知性と広い教養、健全にして豊かな個性」を富山国際学園の建学の精神として確認したうえで、「2. 大学の基本理念、使命・目的、教育理念・目標」の冒頭において、

次のように記している。——「富山国際大学の設立準備過程において、『地球規模で考え、地域に根ざして行動すべき時代にあつて、世界のいかなる人々とも友好関係を結びうる人間を育てる』ことが必要であるとして、『世界の国々の違ったものが違ったままで共存できる原理』や『人間・自然環境などが共生する社会の原理』を探求し、学ぶ場の創造が構想された。そして、立山連峰を目前に望む富山市東南部の丘陵地に、世界の国々との共存や自然との共生にふさわしい学びの空間として『地球むら』(※)をイメージし、自然と建物が一体となった低層・分棟方式による建築様式のキャンパス(現『東黒牧キャンパス』)を構想した」¹⁰。

そこにある「地球むら」に注(※)を附して、「『地球むら』とは、習俗言語が異なる世界の人々が、その違いをこえて出会える場であり、違うものが違ったままで共生できる場でもある『むら』をいう」と注記されている¹¹。

その上で、「このようにして、富山国際大学の基本理念は、『共存・共生の精神と知性を磨く教育を基本に、時代の潮流に対応できる、健全にして個性豊かな人材を育成して、国際社会および地域社会の発展に寄与する』ことであり、富山国際学園の建学の精神や大学創立の経緯を踏まえた理念となっている」としている¹²。

それゆえに、「むら」というと封建時代の同質的・同調的な閉鎖的な「むら」しかイメージできない場合もあるかもしれないが、実はそうした過去の「むら」が廃村となった地を新しい文明の(共存可能な)再生を構想する「文明批評の実践」の場として蘇生の「再墾のクウ」を入れる全く新しい哲学的実験の場なのである。

このような全く新しい「地球むら」の構想も、大学創設時に一朝一夕でひねり出しただけの思い付きではない。この「地球むら」の原型は、1974年の『地上』3月号に掲載された足立原貫「生きつづける営みの原型」という文章にある。高度成長期の1964年の「廃村」を受けて(1972年のローマクラブ『成長の限界』に先駆けて)1967年からの小原における新たな文明構想の実践の営みに基づいて、逸早く環境と資源との限界を見据えたその文章は農と工とのあり方を抜本的に改める構想力を、次のように発揮している。

——「“限りなき大地” “限りなき大海原”があつたはずの地球も、しょせんは限りある<むら>にすぎなかったことが意識されるとともに、人類という<むらびと>の生存を脅かす、この<むら>の荒廃が大問題になってきた。荒廃の元凶が告発され、指弾を浴びる一方、荒廃をもたらす“暮らし方”が反省され始めている。

農の営みからみれば、工業化社会の営みはつねに“収穫作業”だけを行ってきたことになる。収穫作業だけを行う暮らしの仕方であれば『とりつくしたとき』生き続けるためには、新たな自然の恵みを求めて<むらびと>たちは、山のあなた、海のかなたへと移って行かねばならない。しかし、この地球という<むら>の地球人という<むらびと>にとっては、もはや、山のあなたの土地も、海のかなたの土地もない。そうと知れば、生き続けるには、収穫作業だけを行っているような、これまでの暮らしの仕方を変えるしかない」¹³。

ここで「新たな自然の恵みを求めて<むらびと>たちは、山のあなた、海のかなたへと移って行かねばならない」というのも、単なる抽象的な思考だけで抽象的推論が行われているのではない。実はまったく同じではないにしても、数百年という生きる営みの中で有峰湖と小原という「聖地」の先駆者であつた<むらびと>が経験した実際の歴史が背景にあるのだが、それは小原という「聖地」の数百年の歴史へと目

を向けなければならないが、その手がかりは今日あまりない。そのわずかな手がかりをもとにしたこの「聖地」の人々の経験の詳細の解明については、別稿を期したい。

——「収穫するためには育てねば、育てるためには生み出さねば、生み出すためにはかえさねば——“生命あるもの”の暮らしの原理に従わねばならない。先述した<むら>の暮らしがそれを教えてくれる。

<むら>の領域は、無限ではなかった。<むら>の資源は無限ではなかった。そこで営まれた暮らしには、だから、限られた暮らしの領域の中で、限られた資源をたいせつに活用し合って生きていくチエが生まれる。そのチエは『かけがえのなさ』を意識する心に根ざし、『みんな助け合って仲良く平和に暮らそう』を最大の社会正義とする心の支えとなる。そのような暮らし方が、その<むら>に生きつづけられる唯一の方途であったろう。

この地球が<むら>だと知り、地球人が<むらびと>だと知り、<むら>の暮らしは“農の営み”なのだとなれば、“農の営み”を考え直し、そこに、生きつづけるための、さまざまな営み、暮らしの仕方のチエと手法を求めようとするのは、まさに、人類の運命をかけた努力の営みになる」¹⁴——。

これが「共存・共生の精神」の原型であり、それゆえにそれは「地球むら」の哲学と一体なのである。工業都市のように収奪するだけではないという意味で<むら>に根ざした地球を構想し、有限なく地球に根ざした<むら>において「違ったものが違ったままで共存する原理」を構想する。これが21世紀に必要な構想力であり、それを結晶化したものが21世紀に求められる大学の基本理念なのである。合掌集落の廃村の歴史と経験に学びつつ、数十年に渡る「文明批評の実践」の中で生まれた21世紀への実践的構想力をこのように凝縮した基本理念を有する大学が、他にあるだろうか。

5. 「地球むら」の「人と土の大学」とワーヘニンゲン大学

この聖地「小原」では1970年に「人と土の大学」が開学し、毎夏2回ずつ（後には1回）3泊4日の夏季講座が開学する。これは、「現代に失われている大きな二つのもの“人”と“土”の回生の願いをこめるこの催し」である¹⁵。



「人と土の大学 OB/OG会」2015.8.1.小原



「夏の小原で骨酒を飲もう会」2015.8.2.小原

だから筆者が小原において発見した「1976年6月10日」の日付が付された「『人と土の大学』1976年夏季講座」募集要項の冒頭にも、「この時代に失われている大きな二つのもの“人”と“土”の回生の願いをこめて、1970年の夏、私たちは“人と土の大学”を開学いたしました」という記述とともに、「この大学は、誰かにとって『都合のよい』者を養成したり、誰かのために『役立てられる』ような教育が行われるところではありません。だから、学歴や資格、証書や免状などという虚飾とは無縁です」と記載されており、「文明批評の一つの実践」という表現とともに、「“人”と“土”の回生」とともに文明の「蘇生」が構想されていることが分かる。そしてその要項に記されたそのときのテーマが「主題『“むら”のおきて“地球”のおきて』」である。このことから平成22年度富山国際大学認証評価の自己評価報告書に記された「地球むら」が、この「聖地」小原で始まった「人と土の大学」で生まれ育った基本理念であるということが分かる。

1967年以來の小原における「文明批評の実践」の歴史に裏づけられて既に1974年に記された、高度成長の中で行き詰る文明のあり方を「蘇生」させる足立原貫氏の文明蘇生を模索する構想力が、低層・分棟方式の東黒牧キャンパスの原イメージとなった「地球むら」の哲学を生み出したということが分かる。それは、(1)それゆえに自閉的・閉鎖的な封建的「むら」とはまったく異なるからこそ、しかしその「数百年の歴史」の知恵を継承し発展させて地球時代となった現代文明の限界を超えようとするがゆえに、「地球むら」なのである。(2)それゆえに、それが「低層・分棟方式」というのは、一つには今も残る小原の2棟やそのほかの棟の痕跡、さらにそこにある倉庫や神社に痕跡を残す「聖地」小原がまさに「低層・分棟」の合掌集落であったというフィジカル・ポリシーであることを意味する。そうしたフィジカル・ポリシーの原像が、「富山国際大学の聖地」小原なのである。それは現地に残る廃村の痕跡に現地に赴いて直に触れるときに実感を伴って確認することができる。(3)さらにこの「低層・分棟」方式のフィジカルな原型は、ただ「聖地」小原であるだけではない。先の「平成28年度富山国際大学事務職員研修会」のレジュメ1頁の「村の中の大学、大学の中の民家！！・・・オランダ・ワヘニンゲン（ドイツの国境近くの村??）をイメージして、マスプロ的ではないヒューマンスケールで構成する」¹⁶という記述にも実はヒントが残されている。この「オランダ・ワヘニンゲン」が何を意味するかを知る大学関係者はほとんど存在しないかもしれないが、これについては前掲拙稿で報告した、2014年12月18日午後のインタビューにおいて¹⁷、「地球むら」のもとの原像は小原ではないかと筆者が話題を向けると、稲葉氏は次のように答えておられた。—「もちろん原点はそこ小原なんだけれども、もう一つはオランダにワーヘニンゲンという大学があり、その大学はまさに分棟方式のむらの中の大学、大学の中のむら。そここのところは訳した時に、むらの中の大学は合っているのだけれども、大学の中の民家と訳した方が繋がりがいいと今では考えている。ワーヘニンゲンという大学については足立原先生に聞いてください」¹⁸と答えておられた。したがって2016年9月15日の大学職員研修会のレジュメは、この2014年インタビューの考えにもとづいて「大学の中の民家」という表記を採用されたことが言えると同時に、そのレジュメの「オランダ・ワヘニンゲン」というのは前掲拙稿で紹介したオランダのワーヘニンゲン大学のことなのである¹⁹。そして「聖地」小原だけでなく、このワーヘニンゲン大学についても「足立原先生に聞いてください」と稲葉氏が説明していたように、この大学もまた足立原貫氏自身が国際学会で何度か訪れた大学で、その大学が低層・分棟方式であるという情報をもたらしたのも足立原貫氏であることが分かる。ちなみに、オランダのワーヘニンゲン大学の農学・森林学部門は、2014年度の学部別QS世界大学ランキングにおいてヨーロッパ首位、世界2位に位置付けられている²⁰。

「共存・共生の精神」とは熊野川流域の厳しい豪雪地帯の合掌集落の500年以上の歴史に文化的社会的に根ざすだけでなく、農学・森林学ならびに環境科学部門においても先端的なヨーロッパの大学のキャンパスにフィジカルポリシーとデザインポリシーを学びつつ、地域的特性と世界的普遍性と未来に先駆ける構想力をもったアカデミックポリシーの教養形成に根ざすものとして、比類のないものということができるだろう。「地球むら」というコンセプトは、閉鎖的な封建的農村のイメージを遙かに脱却した地球時代の先進的な大学のあり方が参照された上で、さらに富山県での数十年に及ぶ哲学的実践に裏づけられたものなのである。

6. 1989年ベルギー・フォーラム「違ったものが違ったままで共存できる道」

それゆえに、(4)「世界の国々の違ったものが違ったままで共存できる原理」を「探求し、学ぶ場の創造が構想された」という認証評価における自己評価報告書の記述部分のオリジナルもまた、足立原貫氏の哲学である。このことは、さらにベルギーでのフォーラムの記録によっても裏づけられる。

1989年の9月から12月にかけてベルギーにおいて、日本文化と芸術の祭典「ヨーロパリア89ジャパン」が開催され、約200万人を動員した。その一環としてのセミナー／ワークショップ「パラドックス・ジャパン」は、日本文学研究のドナルド・キーン氏を座長に、EC委員会ワシントン代表部のジルベール・デュボワ氏など欧州側から4名、明治大学教授でもある哲学者の市川浩氏など日本側から4人のパネリストを迎えてフォーラムを開催した。そこにおいては日本が天然資源が少なく第二次世界大戦の敗戦国であるにもかかわらず、世界有数の経済大国であることが欧州側からは不可解に映っていることが問題にされた。他にも日本は、経済的には「大国」に見えるにもかかわらず、国際政治の舞台では「小国」に見える。こうして、「日本は驚くべきパラドックスに満ちた国である」(G.デュボワ)というふうに見られているということで²¹、このフォーラムは「パラドックス・ジャパン」と題されて、日本の国際化をめぐる問題が議論された²²。

このパラドックスについて座長のキーン氏から話を向けられたパネリストの足立原貫氏は、「現代の日本の抱えるパラドックスは、本質的に変わらないことを大切にする民族性が、欧米に迫り着き、追い越せという風潮によって起こった急激な変化と、そのために生じたさまざまな摩擦に、必死に耐えている図である、というように、私には考えられてならないのです」と答えている²³。その上で足立原貫氏は「国際化」という概念が混乱して、「単に欧米の真似をすること」と一般に誤解されていることを危惧して、次のように述べている。

——「真の国際化とはそうではなくて、一人一人が自らのアイデンティティーをもっと大事にしていくことでしょ。二十一世紀の人類最大の課題は、違ったものが違ったままで共存できる道を探ることだと私は確信しています。ですから日本人にとって本当の意味での国際化というのは自らを失わずに、それでいて単にヨーロッパのみならずたとえばアラブの世界とか、アフリカの世界も理解しなければいけないし、違ったものがそのままどうやって共存していくのか、その理解を深めてゆく過程ではないでしょうか。かつて私達は違うことは悪いことと教えられてきました。…(中略)…しかしこれではいけないのです。…(中略)…違ったものが共存できるところに、人類の他の動物とは違った尊厳があるのだという理解に立って相手に接してゆく、この心配りこそが本当の国際化の精神ではないかと考えています」²⁴——。

ここに、似た者同士の同質的な繁栄を目指す「共存・共栄」の思想と異なる共存・共生の精神の本質が、明確になっている。

1989年のベルギーにおけるフォーラムでの「21世紀人類最大の課題は、違ったものが違ったままで共存できる道を探ること」という発言の翌年の1990年に、富山国際大学は開学したのであるが、こうしたことから、『世界の国々の違ったものが違ったままで共存できる原理』という富山国際大学の基本理念は、足立原貫氏という農哲学者の小原での実践と「人と土の大学」～オランダ・ワーヘニンゲン大学訪問～ベルギーでのフォーラム「パラドックス・ジャパン」を通じて形成されたものであることは明らかである。

7. おわりに—中国湖南省奥地の少数民族地区からの視点—

そのさらなる痕跡は、当時の地元紙でも確認できる。1989年のベルギーでのフォーラムから帰国した足立原貫氏の帰朝報告の文章が1990年1月31日付北日本新聞の文化欄に掲載されている。ベルギーのフォーラムでの反響を紹介する中で、次のように記されていることも記録しておく価値がある。

—「人類が二十一世紀への橋をつつがなく渡るための極めて重要な課題の一つは『異なるものが、異なつたまま共存できる方途を探り当てること』である。すでに手あかのつきつつある表現のように思えたが、フォーラムで私は、そのことを、人々の自由な意志による選択がきかない、それぞれの“生まれながらの”肌の色や習俗の違いをまるごと理解し、認め合わねばならないこととして強調した」²⁵—。

そして著者はその後半で、「ベルギーへ出かける二か月前、私は中国湖南省西北奥地の少数民族地区にいた」と書き、多様な少数民族が集うその武陵大学での座談の経験を紹介した上で、「その座談の席は、『異なるものが、異なつたまま共存している』様相をわかりやすく見ることができた一例であったように思う」と紹介している。富山国際大学はこの文章が北日本新聞に掲載されてから2か月後の4月に出発したのである。小原が「富山国際大学の聖地」である所以である。

21世紀の今日、移動の自由と不可分のEUから英国が離脱を投票で「思いがけなく」決定し、米国が国境に保護主義の高い壁を作る公約を掲げた大統領を投票で「番狂わせ(upset)」で選んでしまうほど、中東から飛び火したテロと難民に世界がいかに怯え、共存への模索から逃避しようとして必死になっているのを鑑みると、**「異なつたまま共存できる方途を探り当てる」という「共存・共生の精神」が決して「手あかのつきつつある表現」ではなく、ますます時代が必要とする価値ある理念であることが明らかになりつつあるのではないか。**

今の世界で広がりつつあるのは、異なつたものを排除して利益追求する同質的な同類のもの同士の間で増やした利益を山分けしようとする「共存・共栄」の戦略である。それは精神でも「理念」でもなく、まさに山分け利益の同質的増大を目指すために異なつたものを排除して味方同士だけで儲けようとする「戦略」であり、それゆえに戦略的互惠関係である。それが排除された「違ったもの」「異なつたもの」を戦略的に生み出す以上は、排除された「違ったもの」の命がけの自爆的な戦いが熄むことはないとするれば、それは「戦術」としてはともかく長期「戦略」としても間違っていることになる。その証拠と帰結が「壁」である。「戦略」が間違っている原因はおそらく「精神」が病んでいるためか「理念」がないためか、あるいは別の理由によるか。21世紀が、戦略ではなく哲学を再考し再構築することを求めている。

共存・共生の精神が文明再生と「蘇生の物語」であることは、それが育まれた「聖地」へと遡及すること(巡礼)によって具体的に理解することができる。

(註)

- 1 拙稿「「共存・共生の精神」の生成と構造—教育と福祉の統合の基本哲学と大学への「火種」—」富山国際大学『子ども育成学部紀要』第7巻、2016年3月、18頁。
- 2 前掲拙稿、同頁。
- 3 なお、ここで「愛校心」というものの位置と理解については、ヘーゲル『法哲学綱要』（1821年）における「愛国心」というものの位置と理解とが参考にされることが望ましいと考えられる。Cf. G. W. F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden. Theorie-Werkausgabe*. Suhrkamp (Frankfurt a. M), 1971, Bd. 7, § 268.
またこの「聖地」小原が少なくとも文政2年、さらに戦国時代にまで遡る歴史をもつ合掌集落であることに関する詳細は、紙幅の関係で別の機会を期したい。
- 4 富山市大山堅穴住居跡展示館『東黒牧上野遺跡』（解説資料）、参照。この解説資料によると、1994(平成6)年9月に道路改良工事に伴う発掘調査で縄文時代の堅穴住居が発見されて、同年11月に住居址の切り取り保存が決定し、翌年11月に展示館の建築工事着工、1996(平成8)年3月にその復元と建築工事が完成している。
詳細は、富山県埋蔵文化財センター編『町道東黒牧上野山線改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告 東黒牧上野遺跡A地区』大山町教育委員会、1995(平成7)年3月、参照。その「序」には、「縄文時代中期の堅穴住居跡6棟」には「富山県内でも類を見ない極めて残りの良好な住居跡」が含まれるとされる。
なお本稿の当該展示館資料の筆者撮影の写真は、大山教育行政センター(有岡昌徳副主幹)の「公のものですから」という了承を2017年3月22日に得て掲載している。
- 5 当レジュメは、次に「時代背景と ～かくれた夢～」というタイトルのもとに「3人の男達の夢」と記されているものの、さしあたりそこには3人の名前は記されていないが、これについてはレジュメ最終頁の記載をもとに別途説明・考察の価値がある。
- 6 前掲拙稿21頁以降。
- 7 足立原貫『一つの社会の死から』北日本新聞社、1975年、16頁。
- 8 前掲同書、15頁。
- 9 足立原貫・野口伸『きみ青春の一夏 山へ入って草を刈ろう—「草刈り十字軍」運動の発端と展開』三洋インターネット出版、1997年、46頁。
- 10 富山国際大学『平成22年度 大学機関別認証評価 自己評価報告書・本編(財団法人 日本高等教育評価機構)』（平成22(2010)年6月）、1頁。
- 11 同上、2頁。
- 12 同上、2頁。
- 13 足立原貫『一つの社会の死から』27頁。
- 14 足立原貫『一つの社会の死から』28頁。
- 15 足立原貫『一つの社会の死から』44頁。
- 16 「平成28年度富山国際大学事務職員研修会」レジュメ1頁。
- 17 前掲拙稿、21頁。
- 18 前掲拙稿、22頁。
- 19 前掲拙稿、22頁以降。
- 20 オランダ大使館・総領事館「オランダのワーヘニンゲン大学の農学・森林学部門と環境科学部門が、世界上位にランキング」 「ニュース News article | March 20, 2014」。 <http://japan-jp.nlembassy.org/news/2014/03/オランダのワーヘニンゲン大学の農学・森林学部門と環境科学部門が、世界上位にランキング.html>
- 21 フォーラムレポート『PARADOX JAPAN 1989 ヨーロッパから見たニッポン—遠い国、違う文化の相互交流を考える』くれいん館人間行動研究所、1990年、24頁。
- 22 拙稿「国際日本学の課題と富山の哲学運動 —「共存」哲学の「なつかしさ、やさしさ」のアルケオロジーと国際理解—」、富山国際大学『子ども育成学部紀要』第3巻、34頁。
- 23 前掲フォーラムレポート、10頁。
- 24 前掲フォーラムレポート、21頁。
- 25 足立原貫「異なるものの共存 遠い国で考える<下>」1990年1月31日付、北日本新聞、「文化」面。

※ 本稿は、平成28年度富山国際大学学長裁量経費研究助成第1号戦略的教育研究による研究成果の一部である。